

民俗文化

第34号 近畿大学民俗学研究所

2022-12



民俗文化

第三十四号

口絵写真

フィリピン、海辺の民俗

撮影者：辻 貴志

1：ウツボを天日に干す様子 ▶
(セブ州マクタン島)



◀ 2：ウツボ漁の様子
(セブ州マクタン島)

3：ウツボ笥を製作する男性たち ▶
(セブ州マクタン島)





◀ 4：えり
(パラワン島)

5：カニ釜
(パラワン島) ▶



◀ 6：カプトガニの調理
(パラワン島)

7: ガンガゼの採捕 ▶
(パラワン島)



◀ 8: クビレツタを売る女性
(セブ州バンタヤン島)

9: くり舟での移動 ▶
(パラワン島)





◀ 10：サバヒ一稚魚用押し網
(ネグロス島)

11：タツノオトシゴの採捕 ▶
(パラワン島)



◀ 12：ダンドクメンガイの貝柱を取る
作業をする人々
(セブ島)

13：ナマコの乾燥作業の
様子
(バラワン島)



◀ 14：フカヒレ漁師
(バラワン島)

15：ホシムシ ▶
(ボホール島)





◀ 16：ホシムシの採捕の様子
(ボホール島)



17：マングローブの炭焼き ▶
(パラワン島)



◀ 18：曳網漁の様子
(パラワン島)

19：延縄漁の準備 ▶
(パラワン島)



◀ 20：押し網を持つ男性
(ネグロス島)

21：海上集落 ▶
(パラワン島)





◀ 22：貝細工
(セブ州バンタヤン島)

23：干潟での採捕 ▶
(パラワン島)



◀ 24：漁獲の分配
(パラワン島)

25：漁村の様子
(ミンダナオ島)



26：魚を売り歩く子供たち
(パラワン島)

27：魚笊漁の様子
(セブ州マクタン島)





◀ 28：港の様子
(セブ州バンタヤン島)

29：購入したエイを運ぶ ▶
山地民
(パラワン島)



◀ 30：刺網漁の様子
(セブ州マクタン島)

31：食用となるアメフラシの内臓 ▶
(セブ州マクタン島)



◀ 32：水中銃を構える男性
(パラワン島)

33：製作途中のコブシメ・タコ用擬似餌 ▶
(セブ州マクタン島)





◀ 34：潜水漁の様子
(セブ州マクタン島)



▶ 35：船形の魚籠を持つ男性
(セブ州バンタヤン島)



◀ 36：大型のナマコ
(パラワン島)

37：大型の魚釜
（シキホール島） ▶



◀ 38：竹いかだ
（ネグロス島）

39：熱帯魚の流通作業の様子
（ボホール州オランゴ島） ▶





◀ 40：敷網
（ネグロス島）



◀ 41：網漁に出る男性たち
（ミンダナオ島）

口絵写真

ベトナム、海辺の民俗

撮影者：鈴木伸二

1: ダイン
(クアンニン省) ▶



◀ 2: サメハダホシムシの採集
で休憩する女性たち
(クアンニン省)

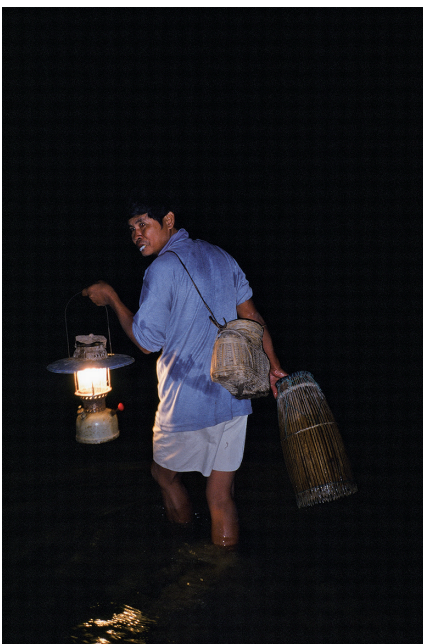
3: サメハダホシムシの
仲買
(クアンニン省) ▶





◀ 4：ドロアワモチの仲買
(クアンニン省)

5：刺網漁を行いに来た
竹船
(クアンニン省) ▶



◀ 6：夜間の引き潮時に行われるタコ漁
(クアンニン省)

7: タコ漁で採集された
ミズダコ
(クアンニン省)



8: 持ち網漁
(ハイフォン市)

9: タット・ヌック・カン
マヤプシキの周りを
掘って水をかき出し魚
やエビをつかまえる。
(ハイフォン市)





◀ 10: ボイ
干潟でハゼ穴に手を入れハゼを捕まえる。
(ハイフォン市)

11: ケオ・ルイ・メモ ▶
小さな土手を円形に作り中心に棒を立てて網をとりつける。
(ハイフォン市)



◀ 12: ケオ・ルイ・メモ
棒に取り付けた網の一方を持ち土手に沿って歩きハゼをとる。
(ハイフォン市)

13: カム・カー・ラック ▶
竹で作った罟をハゼ
穴の前に刺す。
(ハイフォン市)



◀ 14: カム・カー・ラック
(ハイフォン市)

15: カム・カー・ラックに
かかったハゼ ▶
(ハイフォン市)





◀ 16：カオ・クーワ
ガタスキーの前方に針金をつけた竹竿をつけ干潟を滑走しカニの甲羅に当たって音がでると手掴みで捕まえる。
(ハイフォン市)

▶ 17：アサリ漁
(タイビン省)



◀ 18：カニ用の四つ手網
餌が取り付けられている。
(ホーチミン市)

19：オン・チュム
ニッパヤシで作られた
ハゼ用の罟。
(ベンチェ省)



◀ 20：オン・チュムの制作
(ベンチェ省)

21：オン・チュムで採取される
大型のハゼ
(*Periophthalmodon schlosseri*)
(ベンチェ省)





◀ 22：ダイ
7つの網を5世帯で使用していた。
(カマウ省)

23：ダイ
網口を狭める作業。
(カマウ省) ▶



◀ 24：刺網漁
(カマウ省)

25：オン・ドック港 ▶
(カマウ省)



◀ 26：タイ湾で操業する
トロール船
(ハティエン省)

27：海神として祀られて
いる鯨廟の前に停泊
する船舶
(フーコック島) ▶



①	②
③	④
⑤	⑥

表紙

- ① (上段左) サメハダホシムシの仲買 (クアンニン省)
- ② (上段右) ウツボ笠を製作する男性たち (セブ州マクタン島)
- ③ (中段左) ケオ・ルイ・メモ 小さな土手を円形に作り中心に棒を立てて網をとりつける。(ハイフォン市)
- ④ (中段右) 曳網漁の様子 (パラワン島)
- ⑤ (下段左) オン・チュム ニッパヤシで作られたハゼ用の罟。(ベンチェ省)
- ⑥ (下段右) 魚を売り歩く子供たち (パラワン島)

撮影は、①・③・⑤が鈴木伸二、②・④・⑥が辻貴志。

表紙

口絵写真

フィリピン、海辺の民俗

ベトナム、海辺の民俗

(写真・キャプション) 辻 貴志
(写真・キャプション) 鈴木 伸二

目次

近畿の民俗・文化

やまと・まほろば・葺紀行

――中世の瓦大工から近世の瓦屋へ―― 第四部

大脇 潔 1

和歌山県有田川上中流域における櫨の民俗

――櫨の栽培・採取に関する民俗技術の継承――

藤井 弘章 105

和歌山県高野町における棕櫚の民俗

――生育限界地周辺での棕櫚栽培――

藤井 弘章 147

北陸の民俗・文化

越前国東郷槇山城の歴史と構造

娼妓からみた近代日本の公娼制度

――周旋業者・借金・梅毒――

新谷 和之 173

人見 佐知子 187

史料紹介

(元龜二年) 九月二十三日付松永久秀書状

天野 忠幸 213

近江国絵図（近畿大学中央図書館蔵）

二〇二一年度基礎ゼミ受講生・

新谷 和之

217

彦根古絵図（近畿大学中央図書館蔵）

二〇二一年度演習ⅠA受講生・

新谷 和之

221

書評と紹介

野本寛一著『言霊の民俗誌』

辻 貴志

225

活動記録

民俗学研究所第三二回公開講演会（講演要旨）「生駒山地の環境民俗」

俵 和馬

229

東南アジアの民俗・文化

フィリピン・パラワン島南部におけるサメにかんする民俗

辻 貴志

242(37)

嘉定城通志 (Gia Định thành thông chí) に記載された貝類の同定

鈴木 伸二

256(23)

付録

中河内の文化資源―石切地域の鉄道・門前町・新名所と水車―

小嶋 万悠美・小畑 遥・坂田 愛渚・高田 晴彦

（二〇二一年度の文化探索実習と文化活用・発信実習の報告）

和田 祐蔵・辻河 典子・藤井 弘章

278(1)

執筆者紹介

279

投稿規程

281

編集後記

282

近畿の民俗・文化

北陸の民俗・文化

史料紹介

書評と紹介

東南アジアの民俗・文化

執筆者紹介（五十音順）

天野忠幸（あまの ただゆき）

兵庫県生まれ。天理大学文学部准教授。『戦国期三好政権の研究』（清文堂出版、二〇一〇年）、『三好長慶』（ミネルヴァ書房、二〇一四年）、『松永久秀と下剋上』（平凡社、二〇一八年）、『室町幕府分裂と畿内近国の胎動』（吉川弘文館、二〇二〇年）、『三好一族』（中央公論新社、二〇二二年）ほか。

大脇潔（おおわき きよし）

一九四七年、名古屋生まれ。フリーランスアルケオロジスト、元近畿大学文学部教授、民俗学研究所第三代所長。「みちのく蕨紀行―宮城・福島県の被災地を歩いて―」（『民俗文化』二五、二〇一三年）、「七世紀の瓦生産―花組・星組から荒坂組まで―」（『古代』一四二、早稲田大学考古学会、二〇一八年）、「堂内荘蔵の考古学―緑釉波紋埴と埴仏から―」（『古代寺院史の研究』共著、思文閣出版、二〇一九年）、など。

小嶋万悠美（こじま まゆみ）

近畿大学文学部文化・歴史学科学生

小畑遥（こはた はるか）

近畿大学文学部文化・歴史学科卒業生

坂田愛渚（さかた まなみ）

近畿大学文学部文化・歴史学科学生

新谷和之（しんや かずゆき）

一九八五年、和歌山県生まれ。近畿大学文学部准教授、同民俗学研究所員。『戦国期六角氏権力と地域社会』（思文閣出版、二〇一八年）、『近江六角氏』（編著、戎光祥出版、二〇二五年）、『中世後期の守護と文書システム』（共著、思文閣出版、二〇二二年）、「城郭遺構の保存と活用」（『歴史学研究』一〇〇二、二〇二〇年）、など。

鈴木伸二（すずき しんじ）

大阪府に生まれる。近畿大学総合社会学部准教授・同民俗学研究所員。「インドシナにおける科学の始動―ドゥメール在任期（二八九七〜一九〇二年）のギョーム・キャピュを中心に」（『史学雑誌』一三二（四）、二〇二二年）、「トンキンの日本人娼館―トンキン理事長官府第九号機密書簡をめぐって」（『民俗文化』三三、二〇二二年）、「遺され村の美術展―インタビュを中心」（『民俗文化』三二、二〇二〇年）

高田晴彦（たかだ はるひこ）

近畿大学文学部文化・歴史学科学生

俵和馬(たわら かずま)

一九九一年、兵庫県豊岡市生まれ。大阪歴史博物館学芸員。「和歌山県紀美野町における動物の民俗」(『民俗文化』二九、二〇一七年)、「8mmフィルム「天然記念物 但馬名勝 出石鶴山」撮影の背景―出石鶴山の歴史と映像の意義―」(『大阪歴史博物館研究紀要』一八、二〇二〇年)、『大阪歴史博物館館蔵資料集 一六 小絵馬 中コレクション・柴垣コレクション』(執筆・編集、二〇二〇年)など。

辻河典子(つじかわ のりこ)

大阪府生まれ。近畿大学文芸学部准教授。『パリ講和会議体制とハンガリー―亡命政治家からみたヨーロッパ国際関係』(東京大学出版会、二〇二一年)、『「民族自決」という幻影―ハプスブルク帝国の崩壊と新生諸国家の成立』(共著、昭和堂、二〇二〇年)、『多様性を読み解くために』(共著、東京外国語大学海外事情研究所、二〇二〇年)、『ハンガリーにおける体制転換の公的記憶とその起点―「第三の共和国」をめぐる』(『文学・芸術・文化』三〇(一)、二〇一八年)など。

辻貴志(つじ たかし)

大阪府生まれ。近畿大学経営学部・文芸学部非常勤講師、佐賀大学大学院農学研究科特定研究員、国立民族学博物館学術資源開発センター事務補佐員。Collection and Use of Shipworm *Tamalik* (*Bactronophorus thoracicus*) in Philippine Mangrove Forest. *Aghantao* 29 (二〇一一年)『Uses of Domestic Water Buffalo Milk in South Sumatra, Indonesia. *IOP Conference Series Earth and Environmental Science* 995 (1) (二〇二一年) 共著)『An Eco-Material

Culture Study on Fish Traps in the Mekong Basin of Lao PDR. *Bulletin of National Museum of Ethnology* 47 (1) (二〇二一年)『The Mouse Deer Being a Trickster in Philippine Folktales. *The Southeastern Philippines Journal of Research and Development* 27 (2) (二〇二一年)』ほか。

人見佐知子(ひとみ さちこ)

兵庫県生まれ。近畿大学文芸学部教員、同民俗学研究所所員。『近代公娼制度の社会史的探究』(日本経済評論社、二〇一五年)、『第4次現代歴史学の成果と課題3 歴史実践の現在』(共著、績文堂出版、二〇一七年)、『戦争の子ども』からオーラル・ヒストリーを考える』(『日本オーラル・ヒストリー研究』一四、二〇一八年)など。

藤井弘章(ふじい ひろあき)

一九六九年、和歌山市生まれ。近畿大学文芸学部教授、同民俗学研究所所員。『高野町史 民俗編』(共著、高野町、二〇二二年)、『日本の食文化 4 魚と肉』(編著、吉川弘文館、二〇一九年)、『三和インセクティサイド 50年のあゆみ』(編著、三和インセクティサイド、二〇一九年)、『カワウが森を変える 森林をめぐる鳥と人の環境史』(共著、京都大学学術出版会、二〇二〇年)など。

和田祐蔵(わだ ゆうぞう)

近畿大学文芸学部文化・歴史学科学生

民俗文化 投稿規程

(令和四年十二月)

- 一、投稿できる者は、近畿大学民俗学研究所々員および同所員より推薦を受けた者とする。
- 二、受け付けた原稿は複数の査読者による査読を受ける。その結果にもとづき、掲載の可否を決定する。論部の内容に不備がある場合には、編集委員から投稿者に修正を求める。
- 三、刷り上がりは、A四判・縦書き(必要な場合は横書きも可)、一ページあたり三十五字×十九行×二段を原則とする。原稿執筆にあたっては、できる限り、刷り上がりに合わせて字数設定を行うものとする。
- 四、投稿の締切日は、毎年五月末日とする。原稿は、原則として、電子記憶媒体(CD等)を添えて編集委員に提出する。
- 五、別刷は五十部を無料とする。
- 六、刊行後の報文(論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等)は、その著作権が近畿大学民俗学研究所に帰属する。ただし、著作者本人による転載等をさまたげるものではない。
- 七、刊行後の報文(論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等)は、冊子体以外の媒体(近畿大学学術情報リポジトリ等)で公開されることを承諾のうえ投稿すること。ただし、電子媒体での公開に際しては、著作者本人もしくは話者の意向等により、一部または全部を非公開とすることがある。

近畿大学民俗学研究所

編集後記

令和四年（二〇二二）度も、いまだにコロナウイルス感染症の流行は収束していない。そのようななかでも、大学の授業だけでなく、研究所の業務もようやく落ち着きを取り戻しつつある。調査についても配慮をしつつ進めることができつつある。

本誌には、所員、元所員をはじめ、関係者の方々が調査してきた成果として、多数の論考・史料紹介などを寄稿いただいた。本誌も前号に引き続き、近畿・北陸・東南アジアという地域ごとに分類して論考を並べている。いずれも、それぞれの執筆者が長年調査をおこなっている地域を中心にした論考である。口絵写真には、鈴木所員と辻氏の撮影による東南アジアの写真が掲載していただいた。日本の民俗文化を考えるうえでも大変貴重な写真が多数掲載されている。

付録として掲載した東大阪市の文化資源に関する報告は、東大阪市からの調査研究委託を受けて、文芸学部文化・歴史学科の授業の一環で実施した調査をもとにまとめたものである。また、昨年一月に実施した公開講演会の要旨も掲載している。この講演会は近畿大学文芸学部の卒業生で、現在大阪歴史博物館学芸員として活躍されている俵和馬氏に話していただいたもので、対面とオンラインのハイブリッド形式で実施したものであった。

なお、昨年度に引き続き、大東市と民俗学研究所の連携協定による調査も継続しておこなっている。この成果についてはあらためて報告される予定である。

(H・F)

民 俗 文 化 第 34 号

令和 4 年 12 月 21 日印刷
令和 4 年 12 月 21 日発行

編集・発行者 近畿大学民俗学研究所

〒577-8502
東大阪市小若江3丁目4番1号
電 話 (06) 6721-2332



近畿大学

KINDAI UNIVERSITY